

マタイ7章「正しく裁かれる方」

1A 恐れつつ行なう働き 1-12

1B まことの裁き 1-6

1C 自分への量り 1-2

2C 自分の梁 3-5

3C 豚に真珠 6

2B 強い求め 7-11

1C 継続的な希求 7-8

2C 良き物を与える方 9-11

3B 黄金律 12

2A 付いていくべき道 13-29

1B 狭き門 13-14

2B 偽預言者 15-23

1C 実による見分け 15-20

2C 不法を行なう者 21-23

3B 岩の上の家 24-29

1C 聞いて行う者 24-27

2C 権威ある教え 28-29

本文

マタイによる福音書7章を見て行きます。イエス様の山上の垂訓の終わりになって行きます。山上の垂訓において、天の御国における幸いを説かれています。そこで大事なものは、天の御父からどう見られているか？ということでもあります。天の御父からの報い、この方に従っていくということにイエス様は、焦点を当てておられます。神を信じる者たちが陥っていった誤りは、人の目を気にすることでした。人に見えるように奉仕を行なえば、その報いは人から来て、天の御父からの報いは残っていないということです。私たちは、どこに生きがいを抱くのか？報いというのは、人間であれば必ず求めています。その生きがい、報いを天の父からのものとして受け取ることが大事だということです。

それで、ユダヤ人たちが、自分たちが神に仕える活動として、施し、祈り、そして断食がありました。その時に人に見られるようにするのではなく、父なる神が見ておられるようにしなさいということでした。さらに、世における富は、天のために蓄えなさいという教えでした。つまり、御国のために地上の富を用いて、御国における報いを得なさいということです。そこで問題は、自分たちの生活の必要です。そこには、徹底的に神に拠り頼むというへりくだりが必要であることが教えられま

した。空の鳥、野の花を見せながら、彼らは働きもしないのにそのように養われ、着飾っている。神に愛されている、キリストに従う弟子たちはなおさらのことだと言われて、それで神の国と神の国を第一に求め、これらのことは心配してはいけないと言われました。

このように私たちは、自分たちで判断して、自分たちで何とかしようとする生活から離れ、絶えず神に尋ね求め、神の知識の中で生きるようにされています。へりくだりが求められています。そして7章ですが、この流れです。終わりの日に天の御国に受け入れられるのか、つまり神に救われるのかどうか、自分は滅びるのか、それとも永遠の命に入るのか、神の裁きが中心となっています。そしてキリスト者とは、誰であるかを知ることができます。それは、「今、自分が生きていることでは終わらない。来る世があり、そこに行けるかどうかは、今、自分がどの道に進むかで決まってくる。」という意識です。今の生活だけで良いとしないことです。

1A 畏れつつ行なう働き 1-12

7章の始めは、6章の始めと同じように、神に仕えていると言いつつ、過ちを犯していることに対する戒めです。神を信じて、熱心に仕えているつもりが、実は自分が益になるように生きてしまうのが、人間の性です。自分、自我というものに相対して、それを否みつつ生きることは、困難というか、狭い道です。へりくだりの道です。しばし陥ってしまう過ちが「人を裁く」ということです。

1B まことの裁き 1-6

1C 自分への量り 1-2

1 さばいてはいけません。自分がさばかれないためです。

午前礼拝でお話したように、裁くというものは本質的に神のみができることです。しかし、私たちが全ての判断を放棄するものではありません。むしろ、神のかたちに造られている者として、判断するように命じられています。そこで大事なことは、神を畏れかしこんで、その中に生きているということです。イエス様ご自身が、そうしておられました。「わたしは、自分からは何事も行なうことができません。ただ聞くとおりにさばくのです。そして、わたしのさばきは正しいのです。わたし自身の望むことを求めず、わたしを遣わした方のみこころを求めます。(ヨハネ 5:30)」聞く通りに裁くから、ご自身の裁きは正しいと言われていました。ここです、神から言われているからこそ、その言われていることに従って、判断します。

しかし、イエス様はここで「さばいてはいけません。自分がさばかれないためです。」と言われていました。これは、神の言われていることではないことで、判断していることです。パリサイ派や律法学者には、口伝律法がありました。モーセの律法がどのように生活の中で適用できるのか？その枠組みを作り出している律法です。けれども、それは神の命令そのものではありません。あくまでも解釈であり、人の教えているものです。しかし、自分がそれらの掟も守り行うことに熱心になり、

神の命じられていないことまでも判断を下すようになりました。それで例えば、弟子たちが、空腹で穂を取ってその実を食べたら、働いているとして非難したりしました。

英語に presumption という言葉があります。日本語では、「高慢」「厚かましい」と訳されます。この presumption は二つの言葉から成り立っています。Pre という「前に」という意味と、assumption という「思い込む」「決めてかかる」という言葉があります。いろいろなことが起こっていて、まだ確かではないのに、憶測にしかすぎないのに「こうなのだ」と決めてかかる時に、それは assumption と言います。そして presumption はさらに度を越して、「前もって決めてかかる」という意味になります。初めから、「あなたはこんなことをしているのだ」と決めてかかることです。私たちは判断力を働かせるのですが、決めてかかること、ましてや初めから決めつけることは、まさに神ご自身の位置に自分を置いていることです。「自分は神ではない、自分がいかに正しいと感じていても、それもまた全てではない。」というへりくだりが必要なのです。

2 あなたがたは、自分がさばく、そのさばきでさばかれ、自分が量るその秤で量り与えられるのです。

人を裁くということ自体が、神から裁きを受ける対象になります。その時の裁きの基準は、自分が裁いたそれと同じ基準です。自分自身で自分を罪に定めてしまうのです。これは、立場を変えれば自分自身が全く同じ事をしていることに気づくことで理解できます。午前礼拝でも話しましたが、ダビデの例があります。彼は、ナタンによって自分のことを喩えられていることとは知らずに、「そのような者は死刑になるべきだ」と怒りました。彼は罪を告白して死ぬことは免れましたが、自分の量りで裁かれます。

2C 自分の梁 3-5

3 あなたは、兄弟の目にあるちりは見えるのに、自分の目にある梁には、なぜ気がつかないのですか。4 兄弟に向かって、『あなたの目からちりを取り除かせてください』と、どうして言うのですか。見なさい。自分の目には梁があるではありませんか。

イエス様は、山上の垂訓において初めに、原則を教えられます。それから、その原則を分かり易く喩えて、説明されます。ここでの原則は、「裁いてはいけません、裁かれないためです。」ということですが、それをこのような極端な例によって、分かり易く喩えておられるのです。兄弟の目にある塵があって、それで取り除かせてください、つまりそれを正そうとするのですが、実は自分の目には梁、天上にある柱、材木のことで、その大きいものが自分の目にあるではありませんか？とされています。

人間の理解というのは、まことに危ういものです。自分が正しいと思い込んでいた時が、最も判

断力を失います。まさに、自分の目にある梁が見えなくなります。人は、自分に対して嘘をつく、自分を欺いてしまうものです。「エレミヤ 17:9 人の心は何よりもねじ曲がっている。それは癒やしがたい。だれが、それを知り尽くすることができるだろうか。」それで、ダビデは祈りました、「詩篇 139:24 神よ、私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに、傷のついた道があるかないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。」

パウロは、聖餐にあずかるに際して、「しかし、もし私たちが自分をわきまえるなら、さばかれることはありません。(1コリント 11:31)」と言いました。主の真理と御言葉に照らして、自分自身を眺めるのです。有体に見ていくのです。これは、痛い道かもしれません。私が学んだ聖書的カウンセリングの手法は、ここのイエス様の言葉を元にしたものでした。「自己対決(Self-Confrontation)」あるいは「自己葛藤」という名です。御言葉をそのまま素直に自分に照らし合わせると、嫌になるほど自分が見えてきてしまいます。しかしそれが大事な一歩で、そこから神の恵みのみによって、信仰を通して自分が救われたことを確認できるからです。そしてはや、自分自身に拠り頼まず、神の御力に拠り頼むことができるからです。

5 偽善者よ、まず自分の目から梁を取り除きなさい。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からちりを取り除くことができます。

実は、イエス様が 1 節から 4 節までにおいて教えたかったことは、「兄弟の目の塵を取り除いてはいけない」ということではなかったのです。ここで誤解してはいけません。兄弟を戒め、正すことを禁じていたのではなく、むしろ兄弟を戒めること、正すこと、訓戒することを、キリストの弟子としての務めとして教えたいと思われて、このことを語っておられたのでした。ここで、「はっきり見えるようになって、兄弟の目からちりを取り除くことができます」と言われていますね。兄弟の目から塵を取り除くことは、必要な行為なのです。福音書の中でも、イエス様は兄弟を戒めることについて教えておられますし、聖書全体、律法の中にも、また使徒たちの手紙の中にも、教え、戒め、訓戒を与え、時に責めなさいという明確な勧めまでがあります。

しかし、そこには自己対決が必要なのです。自分自身の前にある梁を取り除けるという痛いところを通っていくことが必要なのです。柔和な者こそが、人を正すという働きに関わることができます。「ガラ 6:1-2 兄弟たち。もしだれかが何かの過ちに陥っていることが分かったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。互いの重荷を負い合いなさい。そうすれば、キリストの律法を成就することになります。」

3C 豚に真珠 6

6 聖なるものを犬に与えてはいけません。また、真珠を豚の前に投げてはいけません。犬や豚は

それらを足で踏みつけ、向き直って、あなたがたをかみ裂くことになります。

イエス様がなぜ、兄弟たちの目にある塵を取り除けることを語られた後で、この「豚に真珠」の話がされたのでしょうか？イエス様は脈略もなく語られたのでしょうか？ここには、大事なつながりがあるのです。兄弟を戒めるということが出来るのは、その戒めを受ける者が聞く耳があるからこそできることです。それは愛の行いであり、聖い行いです。真珠のように貴い働きです。知恵や訓戒が、箴言では真珠のような貴いものとして喩えられています。キリスト者は、その交わりの中で注意し合う、訓戒し合うことが御心とされています(例：ヘブル 10:24)。

しかし、すべての人が聞く耳を持っている訳ではありません。むしろ、他人からの助けを嫌い、歯向かい、反発し、敵対する人もいます。心が鈍くされていて、全く聞く耳を持たない者たちに対して、イエス様はそういった者たちを犬であるとか、豚であるとか言われています。「いや、人をそんな豚呼ばわり、犬呼ばわりしないでほしい」とびつくりされるかもしれません。けれども聖書は、人間の罪の現実として、そういった者がいることを教えています。使徒パウロは、肉の割礼に頼る者を「犬」と呼びました。「ピリピ 3:2 犬どもに気をつけなさい。悪い働き人たちに気をつけなさい。肉体だけの割礼の者に気をつけなさい。」そして使徒ペテロは、神によって救われた者たちをたぶらかして、欲望の中に陥れて行く者たちを犬また豚と呼びました。「2ペテロ 2:21 義の道を知っていながら、自分たちに伝えられた聖なる戒めから再び離れるよりは、義の道を知らなかったほうがよかったです。「犬は自分が吐いた物に戻る」、「豚は身を洗って、また泥の中を転がる」という、ことわざどおりのことが、彼らに起こっているのです。」イエス様が、十字架に付けられる前に、初めにヘロデのところへ連れて行かれたのを思い出します。ヘロデは、奇跡やしるしを行なってくれるものだと期待しましたが、イエス様は一切、口を開きませんでした。

2B 強い求め 7-11

1C 継続的な希求 7-8

7 求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。8 だれでも、求める者は受け、探す者は見出し、たたく者には開かれます。

兄弟を正すという働きを、自分自身を吟味しながら行っていくということ。神を畏れかしこんで、自分自身で裁くという過ちを犯すことのないようにしていくということ。また、これまでのイエス様のさまざまな戒めは、到底、自分自身で出来るものではありません。そこでイエス様は、父なる神に求めなさいと教えられます。主に知恵を求める、力を求める、愛を求める、すべての良きものを持つておられる方に求めることこそ、これらの戒めの中に生きることが出来るということでもあります。

しかも、その求めには、かなり強い求めでなければいけないことを教えておられます。求めなさいと言われ、求める中でさらに探し出さなければいけないのであれば、探しなさい、ということです。

そして探しているうちに、閉ざされた戸のようになっていることもあるでしょう。その時は、「叩きなさい」とイエス様は命じられています。求め、探し、そして叩くのです。しかも、ここは現在進行形のようにならされているそうです、つまり、求め続けなさい、探し続けなさい、叩き続けなさいとイエス様は言われています。そして主は必ず、その飢え渴きを伴った求めに答えてくださいます。

ある人が言っていました。「日本で精神的な病が多いのは、叫び求めているからではないか？」治りたいとは願っているものの、貪欲なほど探し求めるその積極性に欠けるということです。福音書には、大声で叫んでイエス様に近づく、盲目の乞食がいました。他の人たちが制しても、彼はわめきたてました。そのような積極性です。詩篇 107 篇には、いろいろな苦しみの中で主に叫び求める姿が出てきます。荒野で飢え苦しんでいた時、苦役に強いられている時、愚かな罪によって死に瀕していた時、船で激しい暴風が吹いてきた時、それぞれで「主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から救い出された。」と書かれています。

2C 良き物を与える方 9-11

9 あなたがたのうちのだれが、自分の子がパンを求めているのに石を与えるでしょうか。10 魚を求めているのに、蛇を与えるでしょうか。11 このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与えることを知っているのです。それならなおのこと、天におられるあなたがたの父は、ご自分に求める者たちに、良いものを与えてくださらないことがあるでしょうか。

どんな悪い父であっても、子が求めるのに、それを与えないで他のものを与えることはないですね。パンを求めているのに石を与えたり、魚を求めているのに蛇を与えるような父はいません。悪い父がそうなのですから、なおさらのこと、天におられる父が良いものを与えないはずがないということです。私たちが、なぜ求めることを控えてしまうかという、父なる神に対する気前良さをまだ信じられないからです。もし主に献げてしまったら、完全に心を開いてしまったら、神に何をされるか分からないという思いが走るのです。自分の嫌いなことを神にやりなさいと言われてしまうかもしれない、とか。けれども、問題は正反対です。神が自分の願うこと、考えていることをはるかに超えて、その願いをかなえてくださる良きお方なのに、求めないことによって、その機会を逃してしまうのです。

3B 黄金律 12

12 ですから、人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じように人にしなさい。これが律法と預言者です。

イエス様は、まとめを行われました。これまで、イエス様は律法と預言者について、お語りになっていました。初めに語られた時に、「律法と預言者を博するためではなく成就するために来たのです。」ということを言われました(5:17)。そして、いろいろと語られて、とどのつまり「人からしてもら

いたいことは何でも、あなたがたも同じように人にしなさい」ということなのだ、ということです。今、イエス様が天の父が、良い物を下さる方であることを言われたので、天の父を真似る私たち、神に倣う者たちも、同じようにしなさいと言われていました。ところで7章の初めは、「さばいてはならない」ということでした。キリスト者の特徴が、何かを批評するだけ、世にあるものをただ批判しているだけのものであれば、信者でない人は白けることでしょう。しかしイエス様がここで言われているように、人からしてもらいたいことをしているのであれば、語ることがなくても、もちろん語らないといけないのですが、その良い行いによって、神の願われていること、その御心を行なっているということです。

このまとめは、しばしば「黄金律」と呼ばれますね。他の宗教にも黄金律はありますが、イエス様の言われたことは一歩進んでいます。例えば、孔子は「自分がされて嫌なことを人にしてはならない。」ということと言ったそうです。つまり、あなたは殺されたくないから、殺してはならないということです。盗まれたくないから、盗んではならないということです。けれども、イエス様は、ただ盗まないという否定形ではなく、与えなさいと積極的に言われているのです。殺してはならない、ではなく、敵をも愛しなさい、祝福しなさいと言われているのです。善を行い、親切にして、愛し、与えていきなさいということです。私たちはしばしば、自分を何かをしなからということで、義の基準を定めます。自分は悪いことをしていないから、キリスト者として間違ったことはしていないのだと。キリスト者の標準は違いますね、何かをしていないのではなく、何かをしているかどうか？で問われます。そして、これは神の力なしには決してできないことです。

2A 付いていくべき道 13-29

これで、イエス様のこれまでの教えのまとめが終わりました。次に、イエス様は次から招きを行われ始めます。説教が終わりにさしかかっているのです、人々が選び、また行動に移すように導いておられるのです。

1B 狭き門 13-14

13 狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広く、そこから入って行く者が多いのです。14 いのちに至る門はなんと狭く、その道もなんと細いことでしょう。そして、それを見出す者はわずかです。

これを聞いていたユダヤ人は、二つの道があることについては聞きなれていました。モーセが、最後の説教をした時に、イスラエル人に対してこう言いました。「申命 30:19 私は今日、あなたに対して天と地を証人に立てる。私は、いのちと死、祝福とのろいをあなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。」どちらかの道なのだという事です。私たちは、絶えずどちらかの道を選んでいきます。死への道なのか、命への道なのか。そしてイエス様はここでは、いのちに至る道は狭く、滅びに至る道は広いと言われています。この広い門と狭い門も、彼らにとっては馴染みのある

ものでした。当時の町は城壁に囲まれているのですが、門と言えば正門があり、多くの人が行き来します。それが大きな門で、広い道です。けれども、裏側にある門は狭く、少数の人しか通れません。道も、もちろん狭いです。人の出入りも少ないです。

これまでイエス様が語られていたのは、狭い門であり、細い道です。大きな門、広い道というのは、パリサイ人や律法学者が教えている道であります。それは一見、厳しいように見えますが、実は自分ができる範囲内で何とか通っていけるようなものです。彼らは、人がユダヤ人として生きて行くのならば、天の御国に基本的に入れると教えていました。そして、外側の行いをしていたら、それで義と認められるとしていました。そして、いろいろな規則を作って、それを守り行っていたら、御国において報いがある、ボーナスがあると教えていました。一言でいうなら、「真面目に生きれば、報われる」ということです。

では、キリストの教えは「真面目に生きれば、報われる」でしょうか？いいえ、これまで私たちがイエス様の教えを聞いてきましたが、自分の力では到底できないことを知りました。真面目に生きようとしても、神に仕えようとしても、どこかで自分の益のために生きているのを発見します。神のために生きていながら、自分のために生きている自分を発見します。「自分」というものが、いつも邪魔になり、自分は救われない、滅ぶしかない存在であることに気づくのです。イエス様は、狭い門と言われ、細い道と言われましたが、ご自身がこう言われたのです。「ヨハネ 14:6 わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」イエス様が道であり、真理であり、命です。この方に拠りすがることによって、この方を求め、探して、しがみついていくことによってのみ、自分なりの規則や正しさではなくて、イエス様につながって、イエス様に付いて行くことによってのみ、救われるということです。

2B 偽預言者 15-23

1C 実による見分け 15-20

15 偽預言者たちに用心しなさい。彼らは羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、内側は貪欲な狼です。

滅びに至る門は広いとイエス様は言われましたが、その道に導くのが偽預言者たちであります。命を約束しながら、その者たちに聞いていけば滅びていってしまうという偽物です。

これまで聖書では、偽預言者が現実の問題として出てきたことを思い出してください。モーセとアロンは、エジプトのファラオについている魔術師がおり、彼らのすることを邪魔しました。イスラエル王国が分裂して、北と南に分かれ、それぞれの国に預言者が現れましたが、同時に預言者の言っていることに反対することを話す偽預言者たちがいました。そして偽預言者たちの言っていることのほうが、まともに聞こえるのです。例えば、アハブがこれから戦いに出るという時に、戦いに

勝てると預言したのが大勢であるのに対して、ミカヤだけが王の嫌がることを預言しました。エレミヤは、バビロンに倒される、またバビロンに服さないといけないと預言したら、祭司や預言者たちが彼を打ちたたいて、牢に入れました。間もなくして、バビロンに頸木は取り除かれると彼らは預言していたのです。

では、イエス様がここで語られている偽預言者というのは誰か？身近なのは、パリサイ人や律法学者です。彼らの教えの中にパン種がありました。イエス様が後に、「パリサイ人のパン種に気をつけなさい」と弟子たちに言われました。わずかな違いが、人を迷わせ、滅びへと向かわしめます。そして、イエス様が復活され、教会が誕生した後に取り組まなければいけなかったのは、ユダヤ的なものとしては、ユダヤ主義があります。異邦人も割礼を受けて、律法を守らないと救われないうとしたことです。律法主義です。ギリシア的なものとしては、グノーシス主義です。イエスは肉体を取られていない、肉に関わることは全て悪であるとした教えです。知的な高慢を取り扱っていません。その後も数々の異端が現れます。

大事なものは、それぞれが「都合が良い」「尤もらしく見える」ということです。羊のように優しく、謙遜に見えます。初めからへんてこな教えであれば、誰も寄り付きません。もっとも見えるから、多くの人が騙されるのです。そしてこれまでの山上の垂訓の学びにおいて分かっているのは、人の自尊心やプライドに訴える教えです。律法主義はそうでしょう、自分の頑張りで正しいと認められるのですから。自分が正しいのだとするのが目標なのですから。同じように、グノーシスも人のうぬぼれに訴えます。霊的な知識を得るものが、より神に近づいているとするのです。聖書をよく知っていて、霊的な用語をたくさん使って、他の人々にはこの人は神に近いと思わせる。しかし、イエス様は違いました。イエス様は、ご自身も父なる神から離れては何もなさらなかったし、できませんでした。イエス様は父なる神と親しく交わりましたが、弟子たちや群衆と共に同じような生活をしていました。世の人に対して地の塩になっても、世から離れることはなかったのです。

16 あなたがたは彼らを実によって見分けることになります。茨からぶどうが、あざみからいちじくが採れるでしょうか。17 良い木はみな良い実を結び、悪い木は悪い実を結びます。18 良い木が悪い実を結ぶことはできず、また、悪い木が良い実を結ぶこともできません。19 良い実を結ばない木はみな切り倒されて、火に投げ込まれます。20 こういうわけで、あなたがたは彼らを実によって見分けることになるのです。

真実な神の人か、偽物かを見分ける方法は、その実によってであります。ユダヤ人たちにとって、ぶどうやいちじくの木は、自分たちに身近な果物でした。たくさんのぶどうといちじくを消費します。また、茨とあざみもありふれており、農業に有害なものです。茨やあざみからこれらの良い実が出てくることなど到底できないことをよく知っています。つまり、偽の教えからは、絶対に良い実は結ばれません。一方で、一見よくは見えないけれども、確実に愛の実が結ばれているということがあ

るでしょう。その反対に、良さそうに見え、愛に満ちているように見え、事実、異端の教会はとても美しく見えます、しかし、その人たちからは実が見えません。

なぜでしょうか？ イエス様だけが良い木だからです。どんなに良さそげに見えても、イエス様以外から何も良い物は出てきません。言い換えれば、何か悪いものが出ているということは、どんなに良いように装っても、その人はイエス様につながっていない、離れてしまっているということです。

2C 不法を行なう者 21-23

続けてイエス様は、偽預言者に対する裁きを宣言されます。21 わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。22 その日には多くの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言し、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの奇跡を行ったではありませんか。』

イエス様は一気に、「その日」という言葉を使って、終わりの日について語られます。旧約時代の預言者たちがずっと語っていた、主が裁かれる日のことです。その時に大事なのは、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではな」ということです。確かに、聖霊によれなければ、イエスを主ということはできません。イエスを主として告白していない人は、天の御国に入ることはできません。けれども、主と言っているだけでは、果たしてその人が天の御国にはいるかどうか、分からないのです。言っているのではなく、果たして行いの実がその言っていることに合わせて出ているのかどうか？ということでもあります。

イエス様は、「天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。」とされています。けれども、それがいわゆる預言者のような活動、外に見えるめざましい活動、ここではしるしや不思議を行なったとしても、それが救われている保証ではないことを教えておられます。イエス様の名によって預言しても、悪霊を追い出しても、イエス様の名によって奇跡を行なっても、それでも御国に入る保証とはなりません。ここで私たちは気をつけないといけないですね。教会が、表向き活発に見えても、それが、イエス様のおられる保証とはならないということです。その人がどれほど外側の働きをしているのか、ではありません。弟子たちにもイエス様は語られました、彼らは悪霊をイエス様の名によって追い出したことを喜びましたが、イエス様も喜びましたが、それよりも、彼らの名が天に書き記されていることを喜びなさいとも、言われました。

23 しかし、わたしはそのとき、彼らにはっきりと言います。『わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け。』

イエス様は、もちろん彼らについての知識を持っています。ここで言うおられる「全く知らない」

は、知識や情報のことではありません。人格的に知っているかどうか？ということです。この人はイエス様を知っているといえるかどうか？なのです。イエスの名を使っていろいろな活動をしていても、イエス様との肝心の親密な関係がないという状態です。そして、イエス様を知っているからこそ、御父の御心を行なうことができます。けれども彼らは知らないで、不法を行なうことができたのです。イエス様をどんなに知識的に知っていようと、もし不法を行なっていたら、その人は知らないのです。

3B 岩の上の家 24-29

そこでイエス様は、もっとも大事な呼びかけによって説教を終えられます。

1C 聞いて行う者 24-27

24 ですから、わたしのこれらのことばを聞いて、それを行う者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人にたとえることができます。25 雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家を襲っても、家は倒れません。岩の上に土台が据えられていたからです。26 また、わたしのこれらのことばを聞いて、それを行わない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人にたとえることができます。27 雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもその倒れ方はひどいものでした。」

イスラエルは、岩のたくさんあるところ。家を建てる時は石で建てるのが通常です。墓も洞窟を使います。そこで、神ご自身が「岩」と呼ばれることがあります。堅固で、いつまでもそこにあり、そこに隠れれば安全というイメージです。それで、旧約の預言者はキリストを「岩」と呼んでいました。ダニエルがその典型で、人手によらずに切り出された石が、人の像に当たって、その像が砕かれて、それでその石が大きな山になったという幻がありました。岩は、ここでキリストご自身を現しています。イエス様こそが岩であり、そこに自分の信仰を立てていることが、洪水のような試練のある時も立っていることができます。次に、「砂」ということですが、ここでイスラエルの人たちが連想するのは、涸れた川でしょう。荒野にあります、冬に僅かに降水があると鉄砲水がその川に流れてきます。そのようなところに家など建てるものなら、すぐに押し流されてしまいます。

イエス様は、終わりに当たって、ご自分が語られたこの言葉、教えそのものが、その人が岩に家を建てるのか、砂の上に家を建てるのかの試金石になるのだということを語られています。「はい、良いお話しでした」として、聞きはしているけれども、行動に移さなければ、イエス様に根を張ることはできません。けれども、今の言葉に反応して、具体的に応答していくのであれば、その人はイエス様の上に家を築くことができます。これは、イエス様の愛から出た警告です。私たちは果たして、御言葉を聞いてそれだけで満足していないでしょうか？それとも、自分自身を主に捧げて、聞いている御言葉をしっかりと行なうでしょうか？

2C 権威ある教え 28-29

28 イエスがこれらのことばを語り終えられると、群衆はその教えに驚いた。29 イエスが、彼らの律法学者たちのようにではなく、権威ある者として教えられたからである。

イエス様の説教は終わりました。ここは群衆の反応です。イエス様が、「しかし、わたしはあなたがたに言います。」と言われていたことを思い出してください、権威をもってお語りになっていました。しかし、律法学者は他のラビの解釈を引用しながら、「このラビはこう言っています」という言い方をしながら、教えていました。イエス様の言葉には権威があるのです。だから力があります、イエス様の言葉をただ良いお話しでしたと聞くことはできません、この方に服従する、従うのです。そうすると聖霊の力によって、イエス様の中に生きることができます。今回は、イエス様が教えだけではなく、その言葉によって変えられていく人々の証しを読んでいきます。